車いすの言語聴覚士誕生　中瀬洋昭さん（熊本）

『さあー、おもいきって、声を出してみよう』

写真・文／小山博孝

「この病院で働けるようになってうれしいです。リハビリに対する取り組みも、意識も高いと思っています。また、私と同じ車いすの人も多いですから、心を開いてリハビリに取り組み、少しでも恩返しがしたい」と意欲いっぱいの中瀬さん

熊本空港近くにある熊本リハビリテーション病院の言語聴覚室。「さあー、おもいきって、声を出してみよう」と、車いすに乗った患者さんに声をかけているのは、〝言語聴覚士〟の中瀬洋昭さん（二六歳）。中瀬さんも車いすだ。

「言語聴覚士とは、いろいろな原因で、ことばやコミュニケーションに障害がある方に対し、障害の改善のために、相談・援助・指導・訓練を行います。また訓練に先立って必要な検査や評価を行います。国家資格のある専門職です」（熊本県言語聴覚士会作成のパンフレットより）

中瀬さんは、子供のころからスポーツが大好きで、高校では空手部に入って活躍していた。練習や試合で、よく捻挫やケガをして病院にかかることがあった。その病院のリハビリの担当者が素晴らしい人だったことから、「自分も将来、この人のようなリハビリの専門家になりたい」と思うようになった。

中瀬さんは高校を卒業後、西日本リハビリテーション学院に入学、理学療法士をめざしていた。しかし、二年生のとき、学校から帰る途中、交通事故に遭い、その後は車いすの生活になってしまった。

「もう、理学療法士になれない……」と、自ら九カ月にわたるリハビリをするなど苦しい時を過ごしていた。リハビリをしながら、「理学療法士がダメなら言語聴覚士がある」ことに気がついた。中瀬さんは、〝リハビリの専門家〟になりたいという思いをあきらめることなく、次は〝言語聴覚士〟をめざして再出発したのだ。

再び専門学校（メディカルカレッジ青照館）に入り直し、四年間猛勉強の日々を送った。国家試験にも合格、平成一七年四月、晴れてリハビリの専門家として、熊本リハビリテーション病院に入った。ここに〝言語聴覚士・中瀬洋昭〟が誕生したのだ。

古閑博明（こが・ひろあき）病院長

熊本リハビリテーション病院
〒869-1106　熊本県菊池郡菊陽町曲手760
TEL 096-232-3111　FAX 096-232-3119

言語聴覚室の朝の打ち合わせが終わると、忙しい１日が始まる

朝９時、リハビリテーション部全員での朝礼

熊本の自宅から車で通勤している

失語症、音声障害、運動性構造障害、聴覚障害、言語発達障害、摂食・嚥下障害など、さまざまな障害に応じて言語訓練が行われる

看護士、理学療法士などとチームを組み、入院患者の病室を訪れて（チームアプローチ）リハビリを行う

「キーボードを弾きながら、ときには昔の演歌や童謡を、患者さんといっしょに歌います」と中瀬さん

訓練中の患者さんの食事を見守る

「さあー、いきおいよく、ふいてー」

失語症の患者さんの訓練

うまく飲み込めているか、患者さんの昼食の様子をみる

「あわてず、ゆっくり、飲み込んでー」

「がんばりやさんですよ。患者さんたちも、中瀬君が車いすでがんばって仕事をしている姿をみて勇気づけられると思います」と、古閑病院長は中瀬さんの活躍に期待している

疑問があるときは先輩や上司の指導を受ける

患者さんの話を聞くことも大切

回診に立ち会って、自分の担当している患者さんの様子を医師たちに報告する

二つの専門学校のときの恩師と久しぶりに再会。リレル・ライト記念老人ホームの小仲邦生（こなか・くにお）施設長と話す

車いすを押すのも仕事です

担当する患者さんの訓練が終わると、病室まで送る